広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第52号　2003　97－105

文学を利用した英語教育

― 高等学校英語教科書における英詩の活用 ―

濱　口　　脩

(2003年9月30日受理)

English Language Teaching Through Literature
— An Application of English Poetry in the High School English Textbook to the Classroom —

Osamu Hamaguchi

The aim of this present paper is to review the present state of English poetry in the high school English textbooks in Japan and to propose some practical application of English poems to the English language classroom. Several cases in which English poems are found in actual English high school textbooks are discussed, and then, since there seems to be no explanation of teaching English poems, with some notes of them and of reading English poems in general, some practical suggetions for improvement of the disuse of English poetry in the high school English class are made.

Key words: TEFL, Literature, English Poetry, Application, High School English Textbook
キーワード：外国語としての英語教育，文学，英詩，活用，高等学校英語教科書

はじめに

現在，高等学校英語の教科書から文学的教材が激減している。文学的教材の中でも，特に韻文による表現形態である戯曲と詩歌については全く採録されていない教科書もある。しかも採録されていても，1～2篇であり，本課題（レッスン）以外の付録的扱いを受けているのが実情である。更に言えば，現場では多くの場合，シラバスからはずされ，その教授と学習は行われていない，と言って間違いない。その理由はある程度推測できる。第一に，それが詩であるからという理由である。第2には，それが小説など散文形式の読み物であるならまだしも，ほとんど韻文で書かれている詩はいわゆる受験英語とは無縁の英語だからという功利的な理由である。教授者側が，詩であるからという理由だけで扱わないと公言するならば，学習者は，やはり詩だから読まなくてもいい，知らなくてもいい，学習しなくてもいい，と免れていくばかりであろう[1)]。ついには，学習者側はあたかも詩歌を不要なもの，好ましくないものでもあるかのように見なしてしまうことになる。その結果，教授者自身が詩歌嫌いを生み出しているそもそもの張本人ということになる。

このような現場の有様は，少ないとはいえ教科書の編集者がなんとかして限られた紙幅を工夫して詩を教材として掲載している努力と意図をだいなしにすることにはならないだろうか。

そのための書き下ろしは例外として，文学的教材にしろ，説明的文章教材にしろ，あるいはその中間の教材にしろ，英語教科書所載の教材のほぼ全てが何らかの改稿を施されている。ところが詩歌だけは原作に何ら手を加えることもなく，いわば無傷の状態で学習者に提供することができるのである。つまり他の教材とは全く異なり，語彙レベルであれ，文法レベルであれ，その両面で一切の改稿から解放されているのである。語彙がどんなに難解であろうと，どれほど破格的な文法構造を持っていようと，学習指導要領に準拠した書き換えの要請は詩歌には及ばない。詩は改稿に関する限り聖域である。同じ文学でも小説や劇の場合は，書き下ろしでもない限り，カット，簡素化，書き換え，

短縮など何らかの形の改稿は避けられない。

詩は小説や劇などの他の文学ジャンルとくらべて音韻面も含め，語彙的にも統語的にも改変する余地は初めから全くなく，仮にある一語を他の語に置き換えただけで異質の別物となってしまうほど，作品全体が絶妙なバランスと統一の上に成り立っていると言える。

換言すれば，文学的文章にとって問題になるのは，説明的文章など非文学的文章と違い語彙的意味や文法的意味よりは当該の言語表現のもつ象徴的意味である。例えば「緑の風」と言う表現は普通に考えれば存在しないもの，すなわち変な表現ということになろうが，これを「(草木が青々と茂る森を吹き抜けてきた) 清々しい風」を象徴している表現と考えることもできる。そういう象徴的意味を孕んだ表現として詩の中に取り込むのである。ただ語彙的・文法的にズレのない，あるいは一般にズレがあっては困る日常表現からすれば，上記の例はズレの大きい，いわば脱日常的表現と言えよう。一方，言葉そのものにも私たちが日常生活で使用するレベルのものと，ある特定の場合に限って使用される言葉とがあって，後者で使う言葉を前者で使う言葉に置き換えることができない場合がよくある。例えば，いくら you と thou の語彙的意味が同じであり，また 2 人称単数という文法的意味においても変わらないからといって，全ての面で互換可能というわけではない。morning と morn の場合も同じである。これらの例は言葉そのものの持つ文体的価値とでもいうものが，それぞれの場合（ここでは archaic という文体的価値が）含まれており，仮にこの文体的価値のない別の語に置き換えると，結果として全体的に別の意味になってしまうのである[2)]。

以下具体的に高等学校英語教科書で採用されている貴重な英詩を取り上げて，外国語としての英語教育で英詩が教材として果たしうる効用について考察を加えてみたい。掲載場所としては，各社ほとんどが表紙の内側見開きを充てている。本課題からはずされ冷遇されているように見えるかも知れないが，学習者にしてみればはじめて手にした教科書の最初の頁に発見される教材であり，学年はじめの新鮮な気持ちで読むことができる配置であるとも考えられる。

比喩表現

Evergreen English Readers（英 R）では，表と裏の表紙の内側にそれぞれ，“My love is like a red, red rose” (Robert Burns)，“October” (Robert Frost) という英米を代表する国民的詩人の詩が，薔薇の花と紅葉の欅並木の写真と共に掲載されている。

My love is like a red, red rose

My love is like a red, red rose,
　That's newly sprung in June;
My love is like the melodie
　That's sweetly play'd in tune.

As fair art thou, my bonnie lass,
　So deep in love am I:
And I will love thee still, my dear.
　Till a' the seas gang dry.

Till a' the seas gang dry, my dear,
　And the rocks melt wi' the sun:
And I will love thee still, my dear,
　While the sands o' life shall run.

And fare thee weel, my only love,
　And fare thee weel awhile!
And I will come again, my love,
　Tho' it were ten thousand mile.

スコットランドの国民的詩人 Burns (1759-96) については特に解説の必要はないであろう。原題は “A Red, Red Rose” で，我が国でも昔からよく知られている。第 1，2 連 (stanza) の脚韻は a, b, c, b 型で，第 3，4 連は a, b, a, b の脚韻となる。第 1 連で顕著な作詩の技巧は比喩の使用である。比喩の中でも直喩 (simile) は最も普通に見られる重要な比喩法であるが，ここでは like という比較語の後に異なる別のものを示すことばを用いて両者間に存在する類似点・共通性を表現している。まず，恋人を真っ赤な薔薇に喩えている。人間である「僕の恋人」(my love) と植物の「赤い，赤い薔薇」とが比喩関係に置かれ，そこに類似点を表しているわけである。初夏に咲く真っ赤な薔薇が，深紅の情熱的な恋心を，そのかぐわしい香りは恋人の甘い香りを，そしてみずみずしいけれども茨のある花は若くはつらつとした恋人の近寄りがたさを表す。仮に like を介さないで My love is a red, red rose と言えば，両者は文法的には全く等しいものとして表されることとなる。比喩の中の比喩，隠喩 (metaphor) となる。今度は読み手は両者の間に一瞬のうちに類似点を捜し出すことになる。すなわち，恋人の属性を薔薇の花に移し替えて，逆に花の方から恋人を説明するのである。次に，第 1 連 3 行目では，人間である「僕の恋人」は無生物の「甘美に奏でられる

旋律」に喩えられる。後者は恋人の甘美で耳に心地よい声を，「僕」の心を幸せな気持ちで包み込み酔わせてしまう妙なる調べに見たてるのである[3)]。

この他にもいくつかの作詩の技巧が施されている。That's, play'd など4カ所で見られる短縮形は，弱強調の韻律(meter)を整えるためのものである。また，第2連2行目が倒置されしかも行末が am I となっているのは，4行目(dry)と脚韻を踏むためである。さらには，第1連の1行目には頭韻(alliteration)が見られる。「赤い赤い薔薇」と日本語に訳したのでは「薔薇」は「赤い」と頭韻にはならないけれども，英語では 'red, red rose' となって，同じ子音［r］で始まる語が3回連続して並列されている。内容的にはそれだけ薔薇の赤い色彩が強調される，すなわち，それだけ恋の熱情が真っ赤に燃え上がっているということになる。このような語頭に見られる頭韻に加えて，句頭にも同一の韻の繰り返しが見られる。第1連では1行目と3行目，2行目と4行目，第2連では1行目と2行目である。この句頭の頭韻は続く第3，4連にも多用されて音楽的なリズム感を生み出している。「はじめに」でも言及したように，例えば第2連には art, thou, lass, thee などの日常の言葉とは異なる「古文体」が詩の言語として使用されている。第4連1，2行目の 'fare thee weel' は farewell の意味。

ところで，第4連の最後では「そして僕は君のもとにまた来よう，たとえ一万マイル離れていようとも」(And I will come again, my love./ Tho' it were ten thousand mile.)と烈しく燃え上がる恋心を歌い上げている。この詩は青春時代の一途な恋愛を主題にしておりその意味では普遍的なテーマである。このような詩が検定教科書の扉に掲載されているのは，恐らく詩の中の「わたし」と同年代の学習者である高校生の心情を大いに汲み取ってのことであろうか。いずれにしろ，Burns のこの詩は，作詩の技巧などの形式面からも主題などの内容面からも，英詩の導入としては多感な高校生が読むには最適の教材の一つであろう。

英詩への誘い

英語教科書の表紙の裏には実に様々な英文が採録されて学習者の目を引こうとしている。格言や諺，著名人などの名言，小説の一部からの引用，マザーグース，ヒットソングの歌詞，果ては相撲の決まり手の説明に至るまでいろいろある。例えば，Ben E. King の "Stand by Me" は手元にある高等学校英語教科書を当たっただけで異なる3社の教科書（*Polestar*, *New Stage*, *Access to English* で，全て「英Ⅰ」である）に採用されている。この曲自体は，最初に発表された1961年に一度ヒットして，さらにそれから25年後に映画化された時にも主題歌として再ヒットを果たしている。このように時間を超越した人気がこの曲にあるのは，メロディーのみならず歌詞(lyrics)にも普遍的な魅力が備わっていると考えられる。一般的に，歌詞もまたすぐれた英詩の教材であって，これをメロディーと共に学習者に提供すれば，音楽自体が既に学習者にとってもなじみのあるものであればますます楽しみながら学習することができるであろう。その場合の指導では，あまり形式や内容について本課題で行うのと同じような緻密さ・厳格さは持ち込まない方が良い。簡単に歌詞の内容を説明して，なぜ歌詞はリズム感があって歌いやすいのか，その点に限って簡単に作詩の原理を説明するぐらいでいい。そして例えばこの曲の場合には，完全なる無償の援助，すなわち友情の本質について語りかけているということを気づかせるだけでいい。要は音楽を楽しみながら英詩に親しみを持たせることである。その意味で，例えば *Evergreen English Course* 所載の Stevie Wonder 作詞作曲 "I just called to say I love you" などは，歌詞の内容を含めて純粋に楽しく学習できる教材例となっている。

New England の自然と人生をあくことなくうたい続けた Robert Frost (1874-1963) の作品の中でも特に英語教科書の巻頭を飾るのにふさわしいのは短詩「牧場」("The Pasture") であろう。これは最初『ボストンの北』(*North of Boston*, 1914) に収められ，その後，彼のあらゆる詩集の巻頭に置かれている。つまり，詩人が読者を彼自身の詩の世界へ誘うという意味で詩集の最初に置かれるのである。従ってこれを英語の教科書の冒頭に配置すれば，英語という言語の繰り広げる世界へ学習者を誘うこととなるのではないだろうか。

The Pasture

I'm going out to clean the pasture spring;
I'll only stop to rake the leaves away
(And wait to watch the water clear, I may):
I shan't be gone long. — You come too.

I'm going out to fetch the little calf
That's standing by the mother. It's so young
It totters when she licks it with her tongue.
I shan't be gone long. — You come too.

会話詩体で書かれたこの詩には，一人称と二人称が用いられている。「わたし」だけが語り，話しかけられ

ている「あなた」には発言の機会がない。そもそもこの場合の「あなた」には二重の意味がある。一つには詩の場面に居て「わたし」が声をかけている「あなた」であり，あと一つには，詩人であるフロストが読者に対して呼びかけているという状況における「あなた」，つまりこの詩の読者である私たち自身である。このように考えてくると，2つのスタンザは，第一義的には牧場の泉の掃除や子牛の世話についての言及と春の牧場への誘いと解される。もう一つには，この「牧場」という詩全体が「読者に対するフロストの詩の牧場への誘い」[4]になっている，と見なすことができる。後者の解釈では，第1連の牧場の泉の掃除も第2連の放牧している子牛を連れてくる仕事もそれほど困難な仕事ではない（その証拠に「(わたしは) 長くはかからないから」と繰り返している）から「あなたも来ませんか」と誘っている。これから展開されるフロストの詩の世界がそんなに難しいものではない，「わたし」が確かに「あなた」を案内します，ということの喩えとなる。もちろん，牧場の泉は生命の源を，母牛がなめるとよろよろするほど小さな子牛は生命の誕生の証を，そして牧場は人間を含め生命が育まれる世界をメタファーとして提示している，と考えられよう。さらにこのメタファーを押し進めると，「わたし」は the Good Sepherd(キリスト)を，「あなた」は「良き羊飼い」に導かれる全ての人間を含意していることに思い至るであろう。確かにここに描かれているのは子羊ではなく子牛であって，また，ここまで教室で言及する必要はむろんない。それでも，なぜ牧場を背景として泉や生まれたばかりの子牛が題材として選ばれているのか，学習者自身に自由に考えさせてその結果を発表させ互いの考えをシェアーすることも詩の理解を深めることにつながるであろう。

授業への取り組み

筆者は今年度(2003年度)前期講義「英語テクスト解析演習」において，ある「高等学校英語リーディング」の教科書を資料として使用した。その表紙見開きに掲載されている Henry W. Longfellow の詩作 "The Arrow and the Song" を取り上げ，高等学校の現場での指導を念頭に置きながら受講生と共に考察を加えた。以下はその時の記録を基にしている[5]。

The Arrow and the Song

I shot an arrow into the air,
It fell to earth, I knew not where;
For so swiftly it flew, the sight
Could not follow it in its flight.

I breathed a song into the air,
It fell to earth, I knew not where;
For who has sight so keen and strong,
That it can follow the sight of a song?

Long, long afterward, in an oak
I found the arrow still unbroke;
And the song, from beginning to end,
I found again in the heart of a friend.

'American National Poet' として親しまれた Longfellow(1807-82)は，穏健な思想を持ち「お上品な伝統」を守り，保守的・懐古的な Harvard Group の詩人である。物語詩 *Evangeline*(1847)，*The Song of Hiawatha*(1855)などで我が国でもよく知られている。

この詩は1845年1月の作で，同年発表の詩集 *The Belfry of Bruges and Other Poems* に収載。弱強四歩格(Iambic tetrameter)の4行詩で，a, a, b, b と脚韻を踏んでいる。本教科書は高校3年生用であるが，語彙的にも文法的にも特に難解なところは見あたらず理解しやすいと考えられる。ただ英詩特有の韻律による破格的な表現については，学校文法と相容れないところがあるので注意を喚起した方が良いであろう。例えば，第1連2行目の to earth は本来ならば to the earth となるべきところであるが，弱強の韻律を守るため（弱弱強となってしまうので）定冠詞の the が結果的に落ちることになったわけである。続く I knew not が I did not know とならなかったのも同じ理由による。第3連3，4行目では韻律と脚韻などの関連から倒置構文となっている。以上のことはまず学習者に朗読指導をすることによって体感させた上で，口頭で簡単に説明を施し理解させれば良いであろう。あるいは，教授者の解説はできるだけ避けて，なぜそのような破格な表現が生まれたのか学習者自身に問いかけ考えさせる方法もある。学習者自身が詩作の原理や韻律法について学ぶことによって，言語が生み出すいわば「美」を感じることが可能となるからである。換言すれば，先述のように文学的教材の中でも特に詩では，語彙的意味，文法的意味を越えた象徴的意味が問題となってくる。言語を単なる情報伝達手段だけに限って考える狭い言語観から解放し，言語が有する人間の感性に訴えかける豊かな芸術性にも目を向けさせたいものである。

構成と内容について考える。第1連では目に見える

「矢」が，第2連では目には見えないが耳で聞こえる「歌」が中心的イメジャリーである。視覚と聴覚に訴えかける。第3連では長い年月の経過を経て「矢」と「歌」の結末が明らかにされ，第1連と第2連が統合された構成になっている。読み進めるにつれて具体から抽象へ，形式の統一から内容の統一へと向かっており，この詩全体の詩想が明らかにされる。「矢」は「歌」を導入するためのさきがけとなり，第1，2連にある sight は第3連に2回繰り返される I found につながる。「歌」は歌うのではなく，「(命を) 吹き込む」(breathe)のである。思いがけなくも，その「歌」が何年も経って「友の心にそのままの形で」生き続けているのを「発見する」ことになる。ここで言う「歌」は何を象徴しているのであろうか。ベートーベンは「願わくば，心から生まれて，心に至らんことを！」と自ら作曲した楽譜に書いたが，それは，人の心から人の心へと至るものであれば，音楽であっても，あるいは言葉であっても構わない。これから英語という言語を学んでいく際の手引きとなる教科書の見開きの部分に，このようなメッセージを孕んだ教材を配置することには大きな意味がある。言葉も目には見えないものであるが，発信者から受け手の心に届くものであり，ちょうど「矢」が射られてから長い年月を経たあとで折れることなくずっと樫木に突き刺さっているのと同じように，それは永遠に人の心に生き残るものである。その時，その「人」は彼の「友」すなわち，良き理解者となるのである。

具体的な授業展開例を考えてみよう。授業をはじめるに際して，まず，教科書を開かないで arrow と song という言葉から想像されるものを生徒一人一人にイメージさせ，それを発表させることで，クラスのイメージマップを作ってみることからはじめる。この作業でクラスの関心が一つにまとまり，学習者自身の頭も活性化され，学習に入る準備ができる。あるいは，タイトルを事前に示してこの二つの言葉の関係を想像させ，自分なりの予測をたてさせておけば，以後の授業における主体的な読みが可能となるであろう。この事前学習(pre-reading activities)を終えたあとで，学習者には詩のモデル・リーディングを示し，音声による詩本来の味わい方を体験させる。次に，詩を聴いてみて感じたことをクラスで共有していく。そこで学習者自身が捉えた気付きをもとに授業者は詩本来の特徴や規則性などについて説明を行う。従ってその説明は学習者の意見を反映させることになる。あるいは，教師による説明はあとにして，学習者による詩の特徴や規則性などの一人調べ学習を課すこともできるだろう。

最終的に詩のレシテーションへつなげるためには韻律のリズムを確認する必要がある。別に iambic tetrameter などの専門的な用語を使う必要はない。手足など身体を使ってリズムを確認しながら繰り返し声に出して練習させるのも一つの方法である。その場合，英詩の韻律が音節(syllabication)を基礎単位として成り立っていることは是非注意しておきたい。この作業のなかで破格的な語法や倒置構文についても言及すればよい。脚韻については学習者自身で容易に発見できる英詩の特徴であろう。その際，スペリングと発音との関係についてはとかく見過ごしがちであるので，授業者は注意する必要があるかも知れない。

詩の内容については学習者自身で書かれていることの基本的・表面的な理解は可能であると考える。それ程この詩は語彙的にも文法的にも特に指導の必要のないレベルの韻文からなる。また，第1連と第2連では，同一の言葉や言い回しがあるので両者が密接に関連し合った内容を持つことは容易に想像できる。従って，何が比較あるいは並列の対象となっているのかに着目させることで共通点や相違点を見出し，続く最終の第3連を理解していく手がかりにつなげたい。第3連は詩全体を統合し詩想をまとめて，作者の主張が込められているところなので，それを的確に把握するのは骨が折れるだろう。そのためには，例えば，繰り返される二つの言葉 arrow と song が何を象徴しているのか，特に後者が何年も経ったあとで何ら変わることなくもともとの状態で（友の心に）発見されるとはどういうことなのか，小グループを作って意見を出し合い，それらをクラスで共有し最後にはおおまかな解釈の傾向を確認する。その場合，教師側の読みや解釈を初めから示すと，それに学習者が影響を受けてしまうおそれがあるのでそのようなやり方は是非避けたい。詩を読む目的の一つは，何よりも詩自体を楽しみ，そこに込められたメッセージを読み手自身が自分のものにすることにある。英語教育における教材としての英詩を扱う場合，その一語一語が詩人の深く鋭い言語感覚や感受性の反映であるということを，感動を持って学習者の心に印象づけるものとして効果的に指導したいものである。

記憶すべき詩

詩は読むものというよりは記憶しておき人生の折々で随時吟じるものであろう。次の詩は，従来，高等学校英語教科書でしばしば採用されてきており，文字通り「思い出」が主題となっている。好きな詩歌があり，それをいつでもその時の心情に応じて吟じることは，何物にも代え難い喜びとなろう。時間の隔たりは溶解

し心はリフレッシュされるであろう。

A Memory

Four ducks on a pond,
A grass bank beyond,
A blue sky of spring,
White clouds on the wing:
What a little thing
To remember for years —
To remember with tears!

作者の William Allingham (1824-89) はアイルランド生まれの作家で物語や劇も書いたが，長編詩 "Laurence Bloomfield in Ireland" (1864) で有名になった。抒情詩人としては *Day and Night Songs* (1854) にその本領が発揮されている。まるで俳句のようなこの短詩は，2音節の beyond, little と3音節の remember (2回) 以外は，全て単音節であり且つきわめてシンプルな字句で構成されている。形式と内容の両面から見て，学習者が記憶するのに全く困難はないと考えられる。

1，2，3，4行目が弱強 (iambus) /弱弱強 (anapaest)，5行目が弱強/弱強/弱強，6，7行目が弱弱強/弱弱強の韻律で構成。5行目だけが3歩格 (trimeter) で，あとは2歩格である。注意すべきは5行目で，What の前に弱音の音節を一つ補う必要がある。脚韻は，a, a, b, b, b, c, c となる。ここに描出されているのはどこにでもあるようなのどかな春の風景である。池に浮かぶ鴨，若草の青々とした堤，春の日の青空，ひょうひょうと浮かぶ白雲，ただそれだけである。そんなささやかなことが，何年もの間記憶となって残り，思い出しては涙するのである。前半の4行で外界の事象を描き，後半の3行で誘発された作者の感動をストレートに（感嘆文で）表現している。リリックの典型である。最終行で with tears と複数形にしたのは前の行の for years と韻を踏ませるためであるが，意味上は with sorrow や with grief と同じである。ただ厳密には tears と複数形になると悲しみの意味が強められる。手元にある教科書では，*English Street, Reading* (英R) と *Apricot English Course II* (英II) の2冊で，共に白雲が浮かぶ青空を背景にした緑の草原の写真が添えられている。

米国の詩人の中では既に先にも取り上げた Robert Frost は最も頻繁に掲載されている一人である。特に "Stopping by Woods on a Snowy Evening" と "The Road Not Taken" はその筆頭に来ると思われる。前者は Pulitzer 賞受賞作 *New Hampshire* (1923) 所載中の代表作で，後者は *Mountain Interval* (1916) の冒頭にあり，良く親しまれている五行連句である。高等学校英語教科書に見られる英詩はほとんど抒情詩であるが，この2篇も米国ニューイングランドの自然の情景を歌いながらそこに詩人の内なる想いを込めている。短詩ではないが語彙的にも文法的にも特に難しい表現はなく，これも人生の折々で思い出しては吟じるのにふさわしい一遍である。前者はとりわけ形式と内容とが最後の第4連に至って統合されて詩想が完結する。詩そのものの構成美と描出されている夕暮れ時の美しい森の雪景色とが見事に調和している。一例を挙げると，第1連では a, a, b, a 型の脚韻であって3行目だけが韻を踏まないのかと思いきや，第2連ではそれが次の新しい韻を構成していくのである。こうして，最終連に至って a, a, a, a と全て同じ韻を踏み脚韻が完成するわけであるが，一方，これに合わせて詩全体に込められた詩想も完結するのである。

Stopping by Woods on a Snowy Evening

Whose woods these are I think I know.
His house is in the village, though;
He will not see me stopping here
To watch his woods fill up with snow.

My little horse must think it queer
To stop without a farmhouse near
Between the woods and frozen lake
The darkest evening of the year.

He gives his harness bells a shake
To ask if there is some mistake.
The only other sound's the sweep
Of easy wind and downy flake.

The woods are lovely, dark, and deep,
But I have promises to keep,
And miles to go before I sleep,
And miles to go before I sleep.

作詩のレトリックで特筆すべきは，2つのメタファーが効果的に詩想を構築していることである。「わたし」は馬に乗り旅の途中である。旅はすなわち人生を暗示する。そしてもう一つは最終連で繰り返される眠りである。眠りはすなわち人生における死を意味する。旅の途中で夕闇が迫ったということは，人生の目的を果

たせないまま死を迎えようとしていることに通じる。季節が冬であること自体がすでに一年の終わりを，そして人生の終わりとしての死のメタファーとなる。これらいわば負のイメージに対して正，つまり死に対する生，を表象する表現も用意されている。「果たさなければならない約束」であり，「まだ残っている旅程」がそれである。すると，この詩には生と死の葛藤が底流しているのかも知れない。音もなく降り続ける降雪は忍び寄る死の世界を，無知な馬が鳴らす馬具の鈴の音はその静寂を破る生の世界への誘いなのか，旅人は気を取り直して旅を続けることにする。

The Road Not Taken

Two roads diverged in a yellow wood,
And sorry I could not travel both
And be one traveler, long I stood
And looked down one as far as I could
To where it bent in the undergrowth;

Then took the other, as just as fair,
And having perhaps the better claim,
Because it was grassy and wanted wear;
Though as for that, the passing there
Had worn them really about the same,

And both that morning equally lay
In leaves no step had trodden black.
Oh, I kept the first for another day!
Yet knowing how way leads on to way,
I doubted if I should ever come back.

I shall be telling this with a sigh
Somewhere ages and ages hence:
Two roads diverged in a wood, and I —
I took the one less traveled by,
And that has made all the difference.

「行かなかった道」を見てみよう。平易な言葉遣いでまるで語りかけるような，それでいて格調高く，韻律も脚韻もきちんと伝統に従った詩形を持つ。森の中に道が二つに分かれている，「わたし」はどちらを行こうかとしばし佇み，結局あまり人が踏みならしていない方の道を行くことにする。今後いつかどこかで，きっとため息混じりにつぶやいていることであろう，今日のこの選択こそが全ての違いのもとなのだと。これは誰でもが経験する人生の岐路に遭遇したときの述懐の詩である。先の "Stopping by Woods on a Snowy Evening" と比べると，自然を描写した詩句でありながら「わたし」の内面の想いが強く感じられ，全体的に，字句の表面的な意味よりもそれらが表象する象徴的意味の方ががストレートに感じられる。道は道ならぬ「未知」に通じているとは言いながら，「わたし」は未来のある時点から現在を，あえて「踏み応えのある」道を選んだ現在の自分自身を，それで良かったんだという諦観にも似た気持ちで振り返っているのである。いずれにしろ，人はときどき，この旅人のように，人生の終着駅から現在のこの瞬間を振り返って内省するだけの心の余裕が必要なのかも知れない。

結局拙論でも Frost の詩を3篇とりあげたが，その全てに共通する問題は人生における選択である。"The Pasture" では，牧場の仕事について行くのか行かないのか選択をすることになるし，"Stopping by the Woods on a Snowy Evening" では，美しい森の冬景色に一瞬時を忘れるけれども約束を果たすために旅程を再度続けて行くことにしたのであった。前者も後者も表紙の見開きという考えようによっては最も学習者の目に付きやすい所に配置されている。ということは，本課題(Lesson)の進度には関わりなくいつでも好きなときに開いて吟じてもらいたいものである。

一つの試み

英国ロマン派の中で最もすぐれた詩人である William Wordsworth (1770-1850) の "Daffodils" は，高等学校英語教科書に採用されている英詩の中で，筆者の手元にある教科書を捜しただけでも最も多い4冊がとりあげている。その中でも *Royal English Readings* (英R) ではこの有名な詩にさきがけて，本課題ではないけれども付録(Appendices)のセクションにおいて，英国の桂冠詩人で批評家の C. D. Lewis (1904-72) が若者のために著した啓蒙的な詩の入門書である *Poetry for You*[6] からの一節を添えて学習者の便宜に供している。このような扱いは，詩を初めて真正面からまともに取り上げており，希有な例と言える。それによると Lewis は，詩を科学との違いを明らかにすることによって解説していく。科学者が事物を分析したり自然界の法則を解明するために理論や観察や実験を行うのに対して，詩人は自らの感情に頼る。詩によって世界を語ることができるのである。感覚は研ぎ澄まされ，よって私たちは人生をより明敏に且つ十二分に意識して，想像力を働かせ記憶の宝を蓄え，ひとたび詩人の感情によって色づけられた「黄水仙の大群」に出くわしたならば，死ぬまで「独居の賜である心の目

に輝き」続けるであろう，と C. D. Lewis は言う。この説明自体，以下に引用する詩のすぐれた解説となっている[7]。

The Daffodils

I wandered lonely as a cloud
That floats on high o'er vales and hills,
When all at once I saw a crowd,
A host, of golden daffodils;
Beside the lake, between the trees,
Fluttering and dancing in the breeze.

Continuous as the stars that shine
And twinkle on the Milky Way,
They stretched in never-ending line
Along the margin of a bay:
Ten thousand saw I at a glance,
Tossing their heads in sprightly dance.

The waves beside them danced; but they
Out — did the sparkling waves in glee:
A poet could not but be gay,
In such a jocund company:
I gazed — and gazed — but little thought
What wealth the show to me had brought:

For oft, when on my couch I lie
In vacant or in pensive mood,
They flash upon that inward eye
Which is the bliss of solitude;
And then my heart with pleasure fills,
And dances with the daffodils.

Lewis は，詩人は作詩にあたっては「自分自身の感情」(his own feelings, emotions) を通して事物を観察し記述する (describe) と説明しているが，そのときの詩人の「感情」は自然の真実に対して鋭敏な，理性に対するところの感情である。Wordsworth は身の回りの自然を観察し，愛し，享受する生活をしながら詩作に耽った。彼の自然に対する敬虔な気持ち ('natural piety') の根底には，「自然はそれを愛した人を決して裏切ったことはなかった」('Nature never did betray the heart that loved her.') という彼自身の確信があるのである。

"The Daffodils" (1807年) には上で述べたようなロマン派詩人 Wordsworth の自然観が滲み出ている。実際に水仙の花の群落に遭遇したのが1802年 4 月，執筆したのが 2 年後の1804年であるので，全体が回想詩の体裁となっている。第 1，2，3 連では，かつて散策中に遭遇した黄水仙の大群に関する思い出が，最終連では黄水仙に象徴される自然と詩人との，いわば霊的交感が語られている。特に第 3 連の 5 行目以降に詩人の自然観が表明されている。これと同じような彼の叙情詩人としての自然観がすなおに表出されており，しかも高等学校英語教科書に採録されている詩としては，"The Rainbow" (1802年) があげられる。

指導に当たっては，詩作の技巧のみならず詩の内容が象徴するものや詩人の訴えかけていること，あるいは読み手がその詩に何を感じるか，ということに対しても学習者の注意を向けさせたい。現在日本で発行されている高等学校英語教科書に見られる英詩のほとんどが抒情詩であるので，この点の指導は避けて通れないであろう。その意味で改めて上記の詩を読み直せば，先の Lewis の解説や上段での筆者の解説以外に，例えば，自然に対する人間の関わり方，自然保護と自然破壊，環境汚染などきわめて現代的なテーマを見出すこともできよう。

終わりに

「高等学校英語の教科書には教材として英詩が採用されている場合がありますが，どのように指導されていますか？」と，筆者はこれまで幾人かの現場の先生に質問したことがある。反応は例外なく「指導していない」というものであった。別に統計を取ったわけではないが，筆者の知る限り，英詩は見向きもされない教材のようである。「はじめに」でも言及したように，その理由はいろいろあるだろう。しかし一方，言語の達人である詩人は，言語学的にも文学的にも最高の注意と関心と理解を持って作詩の作業に臨んでいると思われる。言葉一つを選ぶにも，音声面，意味面，統語面，修辞面など，およそ言語を扱うときに考えられる全ての面から考慮した結果，「これしかない」という言葉を決定していると思われる。そうだとすれば，英詩は，外国語としての英語教育においては有効な教材となるはずである。しかも，書き下ろしでもない限り英詩以外のほとんど全ての教材が原作を改稿したものであるという事実を考えれば，全く無傷のままで学習者に提供されるのは英詩だけではないだろうか。現状では英詩は教科書の埋め草的に所載されている場合がほとんどだけれども，そのような扱いにかかわらず，その特徴的利点は英語教育にもっと活用されるべきではないかと考える。

【注】

1）筆者が初めて英詩について教えを受けた故吉竹迪夫先生も同じことを言って嘆いておられた。ということは，詩を巡る状況は40年間あまり変わっていないということになる。吉竹迪夫『英詩の理解』東京：吾妻書房，1964年

2）池上嘉彦『英詩の文法』東京：研究社，1967年 3-10頁

3）尾島庄太郎『英詩の味わい方』東京：研究社，1957年　33-36頁

4）中条愛子『ロバート・フロストの世界』福岡：九州大学出版会，1990年　46頁

5）「英語テクスト解析演習」の授業には，英語文化系コース以外のコースや他学部から合わせて10名ほどの受講者が集い，毎週全員にレポートを提出してもらい，予習と下調べをした上で授業ではそれを基に議論を中心に積み重ねていく方法をとったが，筆者自身も気が付かなかった点が少なからず見つかった。資料として使用したのは次の教科書である。*Mainstream Reading Course*（英R）大阪：増進堂，2003年

6）C. Day Lewis, *The Poetry for You: A Book for Boys and Girls on the Enjoyment of Poetry*. Oxford: Basil Brackwell, 1944.

7）*Royal English Readings*（英R）東京：旺文社，1996年